
調査報告を受けて

〈調査チームメンバー〉

委員長	汐見 稔幸	白梅学園大学学長
副委員長	加藤 理	文教大学教授

スマホ的個人主義とどうたたかうか

汐見 稔幸

今回の調査で、中高生のメディア生活の実態がかなり明らかになったように思う。

予想されていたことであったが、やはり携帯・スマホという新しいメディアとのつきあいに生活時間のかなりが割かれている実態、テレビの視聴の半分以上は録画したものという現代的な見方、録画してみる番組はドラマ、映画、アニメが多く、普段見る番組で最も多いバラエティーは録画の対象にはなっていないという現実、中3を境にテレビ視聴時間が減る様子等々、興味深い実態がたくさん明らかになった。詳しくは、本報告をていねいに読んでいただきたいと思う。

ここでは、私は一点だけに限定し、データから浮かび上がる今日の若者の生活スタイルのことを考えてみたいと思う。

今回の調査では、中高生の家庭での勉強時間も聞いている。そこで見えてきたのは、現代の中高生は、高3で一度回復するが、全体としては勉強時間は学年が上がるほどきれいに減っていくという現実であった。別のある調査でもこのことは確認されていて、家庭で最も長く勉強しているのは実は小学生で、次が中学生、その次が高校生となり、もっとも勉強していないのが大学生という結果が出ている。これはどう考えたらいいのだろうか。本来、学年が進むほど学びたいことがたくさん出てきて、本を読んだり調べたりすることが増えるべきというのが「常識」的な期待ではないか。しかし現実の日本では逆転現象が起こっていて、どんどん勉強しなくなっていく。「勉強」という言葉に見られるように、明治以降、学ぶことは「がまんしてでも勉めること」ということになってしまったからだろうか。詳しいことは分からないにしても、この現実をどう考えるか、その解明は社会の大きな課題であろう。アクティブラーニングが課題であると国も認めて課題化しているが、大事なことであるように思う。

できれば、こうした現実の改善のためにテレビというメディアが介入できないかぜひ前向きに考えてほしいと思うのは私だけではないと思う。青少年委員会のモニターたちのこれまでの意見、感想を見ると、バラエティー番組への期待は確かに大きいですが、それと並行して知識への欲求、本当のことをもっと知りたいという要求は以前より強くなっているように思う。情報が過多の社会では、逆に本当のことがわからないという矛盾を若者たちは感じ取っているようで、その現実テレビがどう切り込めるか、このあたりに今後メディアの課題の一つがあるように思う。

が、このことを実際に考える際の視点は、もう少し複雑のようである。学年進行とともに勉強しなくなっているということは、学年進行とともにテレビ視聴時間が増えていることを予想させるのだが、調査の結果はそうではなく、テレビの視聴時間も中3をピークに減っていることを示した。テレビやビデオの視聴時間が増えるから勉強時間が減っているということではなく、現代の中高生は、勉強時間もテレビ視聴時間も、学年が上がるほど減らしているということがわかったのである。ただし、友だちとの話の話題にテレビの内容が取り上げられることがかなり多いという結果もあるので、こうした数字からテレビ離れが進んでいると断言することはできない。テレビ離れとは単純にはいえないのだが、しかし、テレビ視聴時間が勉強時間と同じように加齢とともに減るということは、現代の中高生の特色であることは事実である。

どうしてテレビ視聴時間も勉強時間も減っていくのか。見えてきたのが携帯・スマホ生活である。

調査は、現代の中高生、特に高校生にとって、携帯電話とスマホ、とくにスマホは欠かせないものとなりつつあるということを示唆している。生活時間の中で、携帯電話とスマホを扱っている時間が最も長くなってきているのである。これは、やはりというべきか、そうか、というべきか。ともかくスマホ情報を検索したり操作している時間が生活の種々の項目のなかで最も長いという結果であった。

スマホというのは小型PCのような機械であるから、小型テレビゲームだけでなく、ネット情報の獲得、コミュニケーションツールなど、コンピュータ端末として使用できるものである。SNSによるチャットだけでなく、ニュース情報等を手に入れるのも、アニメや動画を見るのも、地図・道路検索やグルメ店の検索するのも、自分がいる位置の確認をするのも、あるいは小説を読むのも、音楽やラジオを聞くのも、辞書であれこれ調べるのも、ゲームを楽しむのも、すべて掌の中の小型機械1台ですむ。それを小器用にこなしている様子が浮かんでくる結果であった。

このことをどう評価すればいいのであろうか。手許の手指の操作だけで脳が興奮し遊びの一定の満足度が得られるということの意味は今はおいておこう。考えてみたいのは、簡単な手許の操作だけで、あれこれの情報が楽に手に入るという問題である。世界から無数といってよい情報が発信されている時代であるから、目的に沿った情報や、話題になっていることの裏情報等を手に入れたときは、間違いなく一種の優越感や万能感のような得意感情を体験するだろう。

人間には、情報を新たにつくったり、それを交換して新たな情報に組み立て直したり

することに興奮と喜びを感じるという本性がある。それを例えば近代社会直前の時代には、サロンという特権的な知的空間で、人々が集い、社会のありようや文化の価値を論じ合った。それが近代社会の諸価値・思想を生み出したことは常識だが、そうした人々の求める知的営為と興奮が、今、手軽だが、ときに怪しさの隠れた、その意味で偽装的な疑似知的空間の場で行われているように見える。サロンなどに比して気楽さという点では比べようにならないくらい気楽だが、より説得力があり、より実証性のある論理を懸命に組み立てて、それを即座にその場で、論的も含めてお互いに評価し合うという知的空間を創作した近代サロンの緊張感と公共性・互換性はみごとに消失している。このサロンはイギリスではパブといわれた飲み屋であることが多かったが、このパブでの公論（個人の利益だけでなく全体の利益を大事にすること）の器を公共性パブリックといい、そこでその考えや思想を公表することをパブリッシュといってきたのは、人間の知的興奮、優位性は、決して個人の勝手な思い込みや主観的優越感のレベルで行われてはいけないということを配慮してきたが故であろう。スマホ的知的空間は、私が満足することが目的の空間で、私の中にある私たちの部分は私の優越感の対象としての私たちでしかない。

いいかえると、スマホ的空間は俺は知っている、私は知っているということを容易化させるが、その価値を公共的空間の中で吟味してほしいと願っている空間ではない。私が他の人間よりも多く知っている、他の人間の知らないことを知っているという類いの主観的満足をもたらせばいいのであって、他者を私の土俵に引き込める限りで私たちの世界をつくらうとしているにすぎない。本当の公共性的個人とは、私の知的営為をまずは孤独な世界で自ら吟味して作り出し、それを改めて公的空間に持ち出して吟味してもらうという根源的な謙虚性を持っている個人をいう。

スマホ的個人は、知ったことを絶えず他者に伝え、同意を求め、感情を吐露し……ということを繰り返す。これは、裏を返せばスマホ的個人は孤独になれないという人間的限界を示唆している。人は、孤独に耐えうる故に公共的になれるのであって、そこを避けて人と繋がろうとすると、個人のない自分主義となってしまう。それは個人を内部から批判する主体を欠いた主体に繋がり、メディアの情報、価値を単なる感性で受容する、公的吟味なき主体をもたらす。

このことについては、多くの人による議論を期待したいが、情報の個人化ともいえるスマホ化現象の持つ意味についてはテレビ・ラジオの関係者もぜひともしっかり議論してほしいと思う。先に述べたように、今日の若者は単純にテレビ離れとはいえない状況

にある。やはりテレビの可能性に期待を持っているのである。だからこそ、余計にこのことの検討が急がれる。

テレビの双方向性化、あるいはこうしたスマホ化的な個人主義を吟味するような番組作り等、喫緊に検討していただきたいと思う。これが、多くの示唆を与えてくれた今回の調査から筆者が感じた一番のことであった。

調査研究結果への所感

加藤 理

青少年委員会に送られてくる視聴者意見の多くは、青少年に及ぼすテレビの悪影響を指摘するものとなっている。また、凶悪な少年犯罪や子どもが被害者になる事件が発生するたびに、テレビの影響が指摘されている。そこで、青少年委員会では、委員会での議論の参考に資することと、加盟各社がテレビ番組を向上させていく上での手がかりとなることを求めて、テレビが中高生に及ぼす影響とテレビの視聴実態を調査することにした。その調査結果に対する所感を以下に記す。

【中高生のテレビ視聴について】

① 「つながり視聴」

デジタル化以降、家族や友人たちとの「つながり視聴」の増加が指摘されるようになってきている。特に、それまでの個室での個視聴から、リビングにある大画面テレビの前で家族と番組を視聴する「つながり視聴」の増加は、他の調査結果からも明らかとなっている。今回の調査では、家族との「つながり視聴」は他の調査ほどはっきりとした傾向として結果が出されていないが、家族視聴が拡大する予兆はうかがえる。こうした傾向を鑑みて、親子で会話できる内容を含む番組、親子での会話を促進する番組、といったコンセプトでの番組作りが今より以上に模索されてもよいのではないだろうか。

② 若者のテレビ離れ

若者のテレビ離れが言われるようになって久しい。だが、中高生の生活実態に関する調査結果とテレビ視聴実態を照らし合わせてみると、年齢や性別ごとに求めている番組が異なるものの、テレビ離れが進行していると簡単に言い切れるものではないことがうかがえる。たとえば、中高生の中でも中学生、特に女子中学生のドラマへの傾倒は男子や他の年代とかけ離れた傾向を示している。また、ドラマを好んで視聴する中高生は録画視聴の傾向も顕著である。加盟各社で視聴者層に関する調査はさまざまに行われていると思われるが、今回の調査結果は、今後加盟各社で行う調査の基礎的調査として有効となるのではないだろうか。

③ 「カスタマイズ視聴」

録画システムの普及で、「カスタマイズ視聴」が一般化していることはこれまでも指摘されてきたが、今回の調査結果はあらためて中高生の視聴実態にもその傾向が顕著

であることを示している。「カスタマイズ視聴」の普及は、民放連がとりわけ児童の視聴に十分配慮するとした、いわゆる「5時～9時」という時間帯設定の是非をあらためて問うことを迫っている。「カスタマイズ視聴」の普及という視聴実態にどのように対応していくのか、喫緊の課題であることを今回の調査結果は浮き彫りにしている。

【テレビの影響について】

① 調査結果から見る中高生へのテレビの影響

今回の調査は質問紙による量的調査であったが、テレビの影響を探る場合、量的調査に質的調査を加味して総合的に見ていくことが有効であると思われる。特に、人間形成への影響を探る場合、質問紙調査だけで見ていくことは困難である。また、中高生は自己形成の途上にあり、自分自身の生育過程とその中での自己形成について振り返ることが難しい年代でもある。自己形成に関する影響は、今回の調査結果を事前調査のように位置づけて、質的調査を加えながらさらに深めていくことが望まれる。

一方で、ファッションや流行、言葉遣い、しぐさなど、表面的な影響について探る上では今回の調査は多くの示唆に富む結果を示している。子どもたちの行動様式の表層に現れる影響と、内面に及ぼす影響の双方について、さらに多角的に調査していくことが必要であろう。

② ドキュメンタリーの増加を

NHKは言うまでもないが、民放各局も良質のドキュメンタリーを制作放映していることは一視聴者として実感している。特に、オリンピックやサッカーワールドカップなどの注目を集めるスポーツイベントの前後には、注目選手や活躍した選手を取り上げた番組が増加し、ドキュメンタリーの番組が増える傾向にある。

一方で、レギュラー番組としてのドキュメンタリーの放送本数が今以上に増加することも望まれる。中高生への影響、特に自己形成における影響を考えると、中高生のモデリングの対象となるような人の生きざまを描いたドキュメンタリーは、テレビという文化が果たすべき役割を考えた時に必要となる。

視聴率の問題もあり、採算を取ることが難しいドキュメンタリーを作ることが民放にとって困難を伴うことは承知している。だが、「テレビ局の良心」として、ぜひ良質のドキュメンタリーを増加させてほしい。

家族視聴をうながすような良質のドキュメンタリーが、一般の中高生も視聴可能な時間帯で放送されることは、テレビへの社会的信用の形成にもつながり、長期的展望をし

た時に、テレビという文化装置にとって意味のある取り組みになるものと思われる。

③ ドラマと中高生

女子中学生がドラマ好きである傾向が調査結果に示されていたが、今回の調査のための事前調査でもその傾向ははっきりしていた。また、女子中学生に限らず、小学生もドラマは大好きであることが、やはり事前調査から明らかになっている。

連続ドラマの不振が話題になる昨今だが、中高生は、視聴したいと思うドラマがあれば録画をして繰り返し視聴し、友人とも積極的に話題に取り上げていく良質の視聴者となる可能性を秘めている。

かつてのドラマでは、中高生が自己を主人公の姿に投影しながら、主人公の苦悩や喜びを自己の苦悩や喜びとして視聴できるドラマが多数存在した。たとえば、『俺たちの旅』『ふぞろいの林檎たち』のようなドラマである。

また、自己形成小説・成長物語(Bildungsroman)とも呼べるドラマも多く、ドラマの中の主人公の成長や葛藤・苦悩・喜びに自己を投影させて視聴する子どもたちの姿もあった。たとえば『大草原の小さな家』『北の国から』、最近では『とんび』などである。こうしたドラマの減少は、ドラマ好きの子どもたちに視聴したいと思わせるドラマを提供できていないことにつながっているのではないだろうか。

昨今、NHKの朝ドラを視聴する小中学生が多いが、その要因の一つに、子役が演じる登場人物に共感しながら視聴し、主人公の成長や感情を自己の感情と同一視しながら視聴する子どもたちの存在が考えられる。今回の中高生とドラマに関する調査結果を参照することで、ドラマ不振の理由や子どもたちに受け入れられるドラマのヒントが得られるのではないだろうか。

子どもが視聴するドラマは、家族視聴にも結び付き、社会的な話題のドラマとなる可能性も高い。このことも視野に入れながら、小学生や中高生のドラマ視聴の実態について分析することが望まれる。

【まとめ】

総じて、テレビは一般視聴者が考えるほど中高生に悪い影響を与えるメディアではないことが調査結果から明らかになった。むしろ、会話に役立つ、ストレス発散になる、生き方の手本が得られる、情報や知識が得られる、社会的関心が増大する、といった肯定的な影響を指摘する結果が多かった。こうした調査結果は、国民がテレビに求めていることでもあり、今後ますますテレビに期待されることとしても受け止めていかなければ

ばいけない。

また、ネットをはじめとするメディアへの接触が多いほどテレビへの接触も多い、という調査結果は、これからのテレビにとって避けて通れない問題であるネットとの関係について貴重な示唆を与えてくれる。

周知のように、テレビが登場した1953(昭和28)年以降、新しいメディアであるテレビは信頼を勝ち得ることに苦勞してきた。「一億総白痴化」という言葉をはじめとして、テレビには胡散臭い印象が付随してきた。だが、実は、今では信じられないことだが、小説等の活字文化も信頼を勝ち得てその地位を確立するまでに、テレビと同様の経過を辿っている。

明治20年代になると、木版に代わる活版の普及と、識字力を持つ潜在的読者の増加によって、出版文化に大量生産の時代が到来する。本は、一人が音読するのを大勢で聞いて楽しむことから、個人所有が可能となり、所有する本を一人寝床で横になって楽しんだりするようなメディアへと変化する。

本が個人所有の個人で楽しむものになると、一人が朗読してそれを大勢が聞いて楽しむ音読から、一人で読む黙読へと読書形態に変化が起こる。さらに、音読に耐える七五調の文体から黙読に耐える口語体へと文体も変化し、ストーリーも七五調に合う波瀾万丈の活劇から個人の内面を描くものや恋愛の苦悩を描くものなどへと主流が変化する。

そうして一人でこっそりと読書を楽しむ若者が増加した明治20年代には、小説を読む若者が増えることは困ったことだ、若者に悪影響を及ぼす、若者を墮落させることにつながる、といった読書の悪影響を危惧する声が社会に増大し、読書する若者に対する文部大臣からの訓令も発せられるようになる。

活字文化のこうした変遷を見ると、新しいメディアが、胡散臭さを伴った信用できないメディアという印象と闘いながら、そうした印象を覆さなければならないという宿命の中でメディアとしての価値を高める努力を続けてきた過程が見えてくる。

テレビ放送から60年以上が経過し、インターネットという新しいメディアが急速に普及している今、テレビはもはや新しいメディアではなくなっている。新しいメディアの座はインターネットに取って代わられているのである。

テレビは、今や古いメディアとなったことを自覚しなければならない。新しいメディアであるインターネットが、かつての小説やテレビと同様に胡散臭い印象を伴って普及している中で、古いメディアであるテレビは、「信頼できるメディア」として相対的にその地位が上がっているのである。そして、その状況の中で、地位をまだ確立できず胡

散臭いメディアとされるインターネットに対して、古いメディアとして信頼を得たテレビには、「正しさ」が求められるようになってきている。インターネットとの共存の中でテレビが人々に求められていること、それは「正しい情報」、「正しい知識」なのである。

デジタル化はテレビに多チャンネル化をもたらした。かつて、報道、ドラマ、情報、教養、娯楽、そしてお色気まで、なんでも揃うデパートのような機能を求められていた地上波は、多チャンネル化とメディアの多様化の中で、視聴者から求められることも大きく変わりつつある。お色気番組などはCSなどの有料チャンネルやインターネットに任せ、誰もが視聴できる地上波には、正しく公正で誰もが「安心」して視聴できる番組を視聴者は求めるようになってきている。

視聴者の人権に対する意識も時代と共に変化し続けている。女性の裸や、暴力的な言動に対する視線は厳しさを増している。イギリスの大衆紙ザ・サンが、1970年から続いていた女性のトップレス写真を掲げた「ページ・スリー・ガール」と呼ばれる名物コーナーを昨年廃止したことは記憶に新しい。これは、女性を性の対象として見下すことに対して展開された「ノー・モア ページ・スリー」と呼ばれるキャンペーンの結果である。

この出来事に象徴されるように、社会の中で、テレビをはじめとするメディアに人々が向ける視線、視聴者の価値観や意識は日々急激に変化している。世の中の急激な変化を敏感に受け止めながら番組を制作していくことがテレビ局には求められている。社会の変化に最も敏感であるべきメディアが、時代遅れの価値観を保持したまま番組を作ったり、過去の成功体験の記憶に安穩としながら番組を作ったりすることは、許されないのである。

今回の中高生への調査結果には、急速に普及するSNSとテレビのこれからの関係構築のあり方や、カスタマイズ視聴が広がる中でのこれからのテレビのあり方などについて考えていく手がかりが多数散りばめられている。信頼されるメディアとして、正しい情報と知識を視聴者に提供し、よい影響を青少年に与えるメディアとして、より一層番組を向上させていくための手がかりに、今回の調査が役立つことを願ってやまない。